

日本における持続可能な開発に向けての考察Ⅳ

藤田英樹

はじめに

専門応用科目として「自動車の環境と安全性能」が開講され、筆者がその担当をしている。この科目では、環境関連のパートにおいて日本の公害を取り上げている。これは留学生に現在の日本の姿だけでなく、過去からの環境問題を知ってもらうことを目的としている。また、履修者間でのレポート相互評価の機会も設けている。その成果の一部を考察で述べた。

今回は、環境会議の動向と日本の四大公害病のひとつイタイイタイ病の概略についてまとめた。専門家対象ではなく環境問題の基礎知識を得るための学生の助けとしたい。

環境会議の動向

2023年11月20日から12月13日の間、アラブ首長国連邦のドバイ（UAE: United Arab Emirates, Dubai）において、国連気候変動枠組条約（UNFCCC: United Nations Framework Convention on Climate Change）第28回締約国会合（COP28）、京都議定書第18回締約国会合（CMP18）、パリ協定第5回締約国会合（CMA 5）、科学上および技術上の助言に関する補助機関（SBSTA）及び実施に関する補助機関（SBI）第59回会合が開催された¹⁾。一般には COP28（太字部分）の動きが大きく取材されているが、その他多くの会議が行われた。

日本からは岸田文雄内閣総理大臣が首脳級会合「世界気候行動サミット」に出席し、2030年までの行動が決定的に重要であることを強調の上、2050年ネット・ゼロの達成、全温室効果ガスを対象とする経済全体の総量削減目標の設定、世界全体の排出量ピークアウトの必要性を訴えた。12月9日の閣僚級交渉には伊藤信太郎環境大臣が出席し、産業革命前と比べた今世紀末の気温上昇を1.5℃に抑えるパリ協定の目標実現が現状では難しいと指摘した上で「気候変動対策を加速する時だ」と呼びかけ、発展途上国の対策を包括的に支援する考えも示した²⁾。

アントニオ・グテーレス国連事務総長（UN Secretary-General Antonio Guterres）は、「COP28の合意文書に化石燃料の段階的廃止（phase out）を明記することに反対した方々に対して、化石燃料の段階的廃止は、好むと好まざるとにかかわらず、不可避であると言いたい。手遅れにならないことを願う」と述べている³⁾。また、UNFCCC 事務局のサイモン・スティール事務局長（UN climate chief Simon Stiell）は、「COP28は真の前進（genuine strides forward）を遂げたものの、

ドバイで発表されたイニシアティブは「気候行動のライフライン（生命線）であり、ゴールラインではない。（a climate action lifeline, not a finish line）」と述べ、進展は納得のできるスピードではないが、ペースが上がっていると指摘した。「化石燃料と、それによる地球を燃やす汚染(fossil fuels and their planet burning pollution)」には急ブレーキをかけるよう合図を送る必要があったとも述べた⁴⁾。

COP28は12月12日に閉幕予定であったが、地球温暖化につながる石油、ガス、石炭などの化石燃料の「段階的削減（phase down）」または「段階的廃止」を成果文書に盛り込むか否かについて、夜を徹して厳しい交渉が行われ、会議は延長された。

日本の四大公害病

公害は、日々の生活においても存在している。四大公害病のひとつ『イタイイタイ病』を概略とともに紹介する。これだけで集約できるものではない。現在もその影響で通常の生活に支障をきたす人々が存在し、日常の生活を営むことに苦勞されている方がいることを最初に理解しておきたい。

イタイイタイ病

富山市内を流れる神通川は、昔から「神の通る川」として人々の信仰の対象であり、富山平野を豊かな穀倉地としてきた。（図1， 2）



図1 神通川河口部（左岸から望む）



図2 神通川河口部（富山空港から望む）

その川の水が流域の人々の骨を蝕み、「イタイ、イタイ」と苦しみながら命を落とす人が出る事など誰も考えなかったであろう。

神通川の上流約50kmの岐阜県吉城郡神岡町（現飛騨市：図3）には、三井金属鉱業神岡鉱業所（現神岡鉱業：図4， 5）・神岡鉱山があり、亜鉛（Zn）、鉛（Pb）などの鉱物を産出した後の排水中に含まれる重金属のカドミウム（Cd）が、流域の農地を汚染し、稲などの農作物に蓄積され、また飲み水として直接人体に取り入れられたことにより被害を受けた。体内に入ったカ

ドミウムは、腎臓障害を起こし、カルシウム(Ca)を破壊する性質があるため、骨を軟化し折れやすくする。出産などでカルシウムが不足しがちな女性に多く被害がでた。重症の場合はくしゃみ程度で骨が折れてしまうほどで、「イタイ、イタイ」と全身の激痛を訴えたのが『イタイイタイ病』の由来となっている。身長がどんどん縮んでしまい、30cmも縮んだ女性がいた。全身72か所の骨折をする方もいた。掛けふとの重さにさえ耐えられずに苦痛を強いられた⁵⁾。



図3 神岡の街並み（奥に鉱業所）



図4 現在の神岡鉱業



図5 神岡鉱業と高原川

1955年8月4日の富山新聞に、はじめて『イタイイタイ病』が新聞報道される。発見者は、婦見郡婦中町の医師：萩野昇博士であった。初めてその存在を知らされることになるのだが、経済最優先を掲げる戦後の日本では、患者救済や原因究明を早急に取り組むようにはならなかった。

『イタイイタイ病』を知るうえで参考となるのが八田清信著『死の川とたたかう イタイイタイ病を追って』（図6）である。

八田は、萩野昇医師の記事を富山新聞に掲載した新聞記者である。神通川流域に長く奇病とされていた病の真実を探求した萩野昇医師、住民、科学者が『イタイイタイ病』が公害によるものであることを企業に認めさせるまでを綴ったものである。多くの漢字にルビが付いているので留学生でも簡単に読むことができる。また、畑の作品（図7）は、汚染地域の環境再生を成し遂げた科学者の記録であり、汚染源調査、公害対策など企業側の環境対策が綴られている。

1961年6月24日、第34回日本整形外科学会にて萩野昇医師はカドミウムが『イタイイタイ病』の原因である説を発表する。

「私達の研究に対して、それだけ社会の関心が高まっていることは嬉しい。しかし、新聞記者

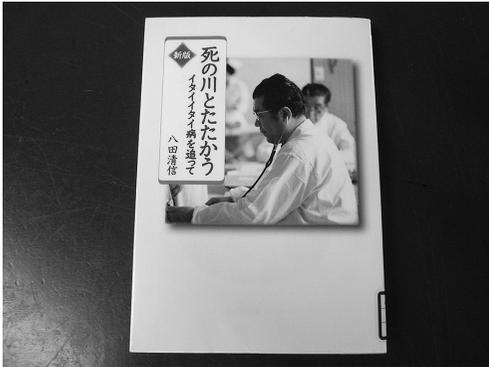


図6 八田清信の作品

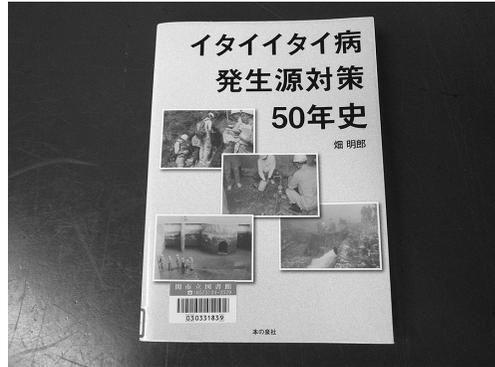


図7 畑 明郎の作品

たちの言葉の端々から、全部が全部、好意的な関心とは限らないことも感じられる。でも、私は恐れない。私には、何の野心もないからだ。ただ私は、一人の医師として、今まで力の限り進めてきた研究の、ありのままの結果を学会に報告するだけである。』⁶⁾ 多くの計り知れない重圧が萩野先生にのしかかっていることが予測できる。

小松義久（後にイタイタイ病対策協議会の初代会長）さんは、自分の母親と同じような病気で苦しんでいる患者が、自分の住んでいる地域に多いことを知り、「世間では、救いようのない業病というけれども、病気には必ず原因があるはずだ。僕は、どうも、神通川の鉱毒があやしいと思う。なぜなら、あれほど農作物に被害を与えている川水が、人間の体に無害だなんて、どうしても考えられない。」と鉱毒を疑う気持ちが深まっていった。

「私を可愛がってくれた祖母の命を奪い、今また、自分を育ててくれた母を苦しめている、にくい犯人。その犯人が神岡鉱山の鉱毒とわかった以上、まず、第一に神岡鉱山に鉱毒を流させないようにしなければならない。それから、今までの被害の一切の責任を、神岡にとってもらわなければならない。そのために、ぼくは戦おう。それが、何の罪もないのに苦しまなければならない患者を救うことになる。また、祖母や母の恨みを、いくらかでも晴らすことになるのだ。』⁷⁾

1968年5月8日に厚生省（現厚生労働省）見解が発表され、『イタイタイ病』は公害病として認められた。これは日本の公害病認定第1号となった。当時の厚生大臣：園田直氏は、「カドミウムがどのようにしてイタイタイ病を起こすか、ということが、すっかりと証されなくとも、カドミウムがイタイタイ病の原因であるということが、はっきりしたら、公害病と認めるべきである。」と公害に対する政治の在り方を、明言した。

1971年6月30日、富山地方裁判所第一号法廷においてイタイタイ病第1次訴訟の判決が下り、住民側勝訴となった。岡村敏夫裁判長の判決文（図8）には「企業の生産活動によって、川が汚染され、人間の生活や生命を脅かす場合が起こってきている。今のところ、そのような自然の破壊を防ぐ制度が確立されていないので、被害が起きた場合は、被害を起こした企業に、損害を賠償してもらわなければならないと考える。」多少の公害はやむ負えないと考える日本の政治や企業態度

を鋭く批判した。さらに「神岡鉱山は、カドミウムが人体に害を与えるということをちゃんと知っている。…それなのに、神岡鉱山は、過去に自分が起こした被害には、まったく目をつむったままである。そのことがどれほど被害者を苦しめたか、計り知れないものがある。」と述べ⁸⁾、患者に対する深い気持ちを示した。

1972年8月9日にイタイイタイ病第1次訴訟控訴審で住民側が完全勝訴した。その翌日、三井金属鉱業との直接交渉が行われた。その結果

「病気の原因を認め、患者の補償を行う誓約書」「発生地過去の農業被害の補償と土壌の復元費用の全面負担の誓約書」「今後公害被害を発生させないことを確約し、住民の立ち入り調査を認める公害防止協定書」の3つの文書に同意し、署名が行われた⁹⁾。昔から続く被害住民の苦しみと強い願いが企業に届き、ようやく被害者救済と農地の土壌復元、住民が参加する公害防止対策が始まることとなる。

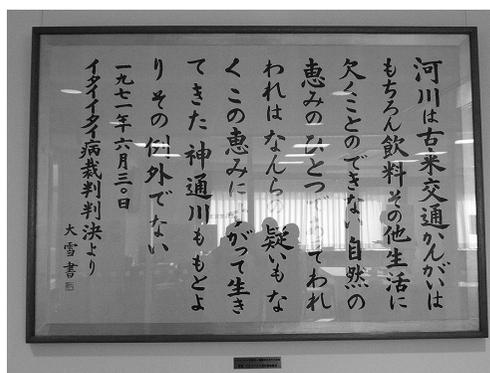


図8 裁判判決文の一部

考 察

環境会議の動向では、初日に昨年のCOP27で設置検討された「損失と損害」基金 (loss and damage fund) の大枠についての決定が採択された。途上国が長年にわたって主張したことが開会合において採択されたことは大きな驚きとなった。

第1回グローバル・ストックテイク (GST: the Global Stocktake process) の成果文書が出されたが、1.5℃目標達成のための緊急行動が必要となることが確認された。これは、宿題のようなもので、日本も今回の合意内容を踏まえて、実現可能な目標を策定し、達成に向けた気候変動対策を加速させる必要がある。ただ、原発回帰の成果文書には大国主導の動きもあり、原発に依存できない日本は、化石燃料を使い続けたい本音をどのように工夫するかが今後の目標となる。

日本の四大公害病として『イタイイタイ病』について述べた。さかのぼると明治時代にも鉱毒被害はあったようで、「富国強兵」「殖産興業」の国策においては苦しむ人々の多少の犠牲は何も策を取ることもなく、時だけが過ぎてしまったようである。

小松みよさんの言葉で綴られた絵本 (図9) には、

「公がいというのは、おそらくなくならないでしょうねえ。会社がはってんすると公がい病が出てきますからねえ。

公がいというのは、人間が人間をおしつぶすものでね、おしつぶされた人間をすくうのもまた人間じゃないかと思うんですよ」¹⁰⁾と公害への思いが書かれている。

2024年1月5日にイタイタイ病対策協議会が開設している清流会館（図10）を訪問した。

偶然にもイタイタイ病対策協議会会長・小松雅子氏に展示説明をしていただける機会を得た。

小松氏からは「能登での地震により、堆積場の状況に変化はないかなど企業側にも情報をお願いしている。」「土壌復元についても、多くの時間を費やしてきているが、最初の頃の部分での不具合もあると聞いているので、再度施工するなどの処置を考えている。」など最新の情報を伝えていただくとともに『ことが起きてからの「想定外でした」は許されない』『イタイタイ病は終わっていません。』という言葉を伺って、語り継ぐ大切さを再認識した。

今年度の授業履修者に対しても日本の四大公害を説明した後「四大公害病から一つについて詳しく記述し、自分の感想・考えたことを記述しなさい。」というレポートを課した。その感想・考えを以下に記す。

酒井は、イタイタイ病について

『神通川流域では既に明治時代から稲の不作被害が出ている。大正時代には農家の人々が鉱山を原因と考え国や富山県に訴えるが、それらの時点で公害を止められなかったことは残念だ。公害はとても怖いものだった。排出する側もそのまま川に流れることで、被害が出ると思っているのかは分からないがもっと考えてほしいと思った。このような公害は二度と起こしてはならないと思った。』

黄は、イタイタイ病について

『公害病は、病院に行って治療してもらえる病気ではなく、人々は何もできないです。私たちは今のように発達した時代に生きていて、みんなが穏やかに学校や仕事に行けることがどんなに幸せなことだろうか。』

今は、イタイタイ病について

『生物が発する警告は注意深く受け取らなければならない。イタイタイ病を含むすべての公



図9 小松みよさんの絵本



図10 清流会館

害において、人間より先に動植物が被害を受けていたであろう。原因究明や対策を先延ばしにしてはならない。実際に企業や政府が原因を受け入れなかったり、原因を特定しなかったりことにより被害が拡大してしまっている。私は自動車産業に携わる一員として自動車から排出される汚染物質を適切に処理するように心がけたい。』

田村は、水俣病について

『原因物である有機水銀が特定の会社から排出されたことが断定できなくても、その可能性が高いことを認識できる状態であったのに対策を講じることをしなかったため水俣病が拡大してしまった。とてもひどいことだと思う。生産性を優先して対策を取らなかったことで大きな問題になってしまった。もっとしっかりと対策を立てることができていたら安全で豊かな暮らしができたのではないかと思います。』

ティは、四日市ぜんそくについて

『ベトナムでも多くの方が大気汚染の影響で気管支ぜんそくを患っています。予防策も取られていないようで、国内の患者は増加傾向にあります。特にこどもの患者が増えているようです。人々が普通に生活する権利を、企業の利益優先の考え方に負けないように何か早急に対策を考える必要があります。』

おわりに

COP28は、例年に比べて日本での報道もかなり少なかった。パリ協定におけるこれからの日本の目標設定に注目する必要がある。SDGsの目標とする2030年までにどこまで到達できるのかかなりの不透明さは否定できない現状であり、現況から到達不可能なものも考えられる。



図11 顕彰碑（表面）



図12 顕彰碑（裏面）

（図に利用した現地写真は、筆者が2021年10月、2023年10月、2024年1月に神岡・富山に向いて撮影したものを使用した。）

清流会館を訪問し、小松雅子氏（小松義久氏の子）にイタイイタイ病対策協議会・結成50年記念の顕彰碑（図11, 12）の碑文全文のコピーをいただいたので、イタイイタイ病についてはさらに詳しく調べていきたい。お忙しいところ、報道取材の合間に時間を割いて展示されているものを丁寧に説明していただき感謝いたします。訪問時の富山市においては、令和6年能登半島地震の影響はなかった。このたび、石川県能登地方で発生した地震によって、被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。被災地域の皆様の安全と被災地の一日も早い復興をお祈り申し上げます。

引 用

- 1) 2) 環境省 HP COP28結果概要 [<https://www.env.go.jp>]
- 3) 4) 国際連合広報センターHP [<https://www.unic.or.jp>]
- 5) 宮本憲一監修・草の根出版会編『日本の公害3 身体を蝕む』日本図書センター（1996）P.120
- 6) 7) 8) 八田清信著『死の川とたたかう イタイイタイ病を追って』偕成社（2012）P.118 P.143-144 P.161
- 9) 一般財団法人 神通川流域カドミウム被害団体連絡協議会制作『甦った豊かな水と大地 イタイイタイ病に学ぶ』令和3年3月版 富山県（2017）P.18
- 10) 金澤敏子文 生地京子絵『みよさんのたたかいとねがい』イタイイタイ病を語り継ぐ会（2021）P.29

参 考 文 献

- 一般財団法人 神通川流域カドミウム被害団体連絡協議会制作『甦った豊かな水と大地 イタイイタイ病に学ぶ』令和3年3月版 富山県（2017）
- 一般財団法人 神通川流域カドミウム被害団体連絡協議会協力『よみがえった美しい水と豊かな大地 イタイイタイ病に学ぶ』令和5年3月版 富山県（2012）
- 八田清信著『死の川とたたかう イタイイタイ病を追って』偕成社（2012）
- 畑 明郎著『イタイイタイ病発生源対策50年史』本の泉社（2021）
- 金澤敏子文 生地京子絵『みよさんのたたかいとねがい』イタイイタイ病を語り継ぐ会（2021）
- 政野順子著『四大公害病』中公新書（2013）
- 除本理史監修『調べる学習百科 未来のために学ぶ四大公害病』岩崎書店（2016）
- 安藤聡彦・林美帆・丹野春香編著『公害スタディーズ』ころから（2021）
- 宮本憲一監修・草の根出版会編『日本の公害3 身体を蝕む』日本図書センター（1996）

参 考

- （イタイイタイ病に関する情報を知ることのできる場所と HP の URL）
- 富山県立イタイイタイ病資料館：富山県富山市友杉151番地（「とやま健康パーク」内）
[<https://www.pref.toyama.jp/1291/kurashi/kenkou/iryuu/1291/>]
- 清流会館・イタイイタイ病対策協議会：富山県富山市婦中町萩島684番地